

公益社団法人私立大学情報教育協会
平成 25 年度第 1 回知の探求サイバー協同学習支援委員会議事概要

- I. 日 時：平成 26 年 1 月 20 日(月) 17:00 から 19:00 まで
II. 場 所：私立大学情報教育協会事務局 会議室
III. 参加者：向殿担当理事、國領委員長、高木委員、青木委員、大原アドバイザー
事務局：井端事務局長、森下主幹、野本（記）

IV. 検討事項

1. 委員の紹介

- ・ 本委員会は、委員 4 名とアドバイザー 1 名で進めることで、各自から自己紹介がされた。

2. 「知の探求・協同学習サイバー・コンソーシアム」構想の背景について

- ・ 平成 20 年ごろから、大学の有能な先生が退官されたことにより大学で足りないものが浮き彫りになってきた。退官されたことで知見が頓挫して授業がなくなってしまった例もあり、その知見をネット上で活かすことが考えられないか。
- ・ 国、社会の発展に主体的に取り組むことに志を持つ若者を育成すること。日本の政治をブラッシュアップしてイノベーションに関与できる能力を育成するためのフォーラムをネット上に構築する。
- ・ 学び合いのための体制として、知識提供者の知見、学びのシナリオをつくる人、コーディネートする組織などの関わり合いを構築できないか。
- ・ 学習は俯瞰・多面的に見られる人間づくりが必要として、解のない問題のために関連領域の方々と有能な学生がネットでの学びの環境を構築できないか。
- ・ 実施のためのテーマとして「安全・安心な社会」考えてみた。
- ・ コンテンツは既存の利用や先生に 10 分程度の話をいただき、それを学生が学習・ディスカッションを行い、ファシリテータが支援することが考えられる。
- ・ 23 年度に実施した加盟大学へのアンケート意見からは、概ね賛同が 3 割、具体化を見ないと判断できないが 6 割で不安視する声も多かった。

3. 委員の意見（下記意識合わせを行った）

- ・ 大学、企業が手をあげるか、求心力を持つ先生を集めて形をつくり、そこから呼びかけることではどうか。ただし、予算が用意できるかが課題ではないか。
- ・ 安全・安心を地球規模で考えられること、さらに大学生より若い年齢層にも広げられないか。論理的思考の元、なぜの部分、新しい教育モデルで提案できないか。
- ・ クラウドとスマホの組合せで今までと構造の違いが出て変化の途中段階、ネットでの展開の仕組みの検討が必要。
- ・ 大学ではパイロットプロジェクト立ち上げのイメージか。パイロットとしてプロセス含めて紹介することで新しい教育モデルの参考にならないか。大学、地域、産学で連携し、先生ひとりの授業ではなく、最良の教育が受けられる環境の教育モデルとして考えられないか。
- ・ 知識として活用できるレベルまで学習させたい。例えばジャンルの違う人を説得できるレベルなど、横断した力や体系だった力が必要ではないか。
- ・ 大学を超えて実施する場合、各大学の個性は活かせるのか。大学の区分けはせずみんなで盛り上げることにしているが、参加大学の理念との関係はどのように考えるか。大学よりエク

ステーションとしての考え方になること、新しい知を目指すプラットフォームとする。

- ロボコンの例では、モデリング設けて走るかのコンテストを実施して、翌日に1日かけて技術者がセミナーで説明（解説）する形式としている。
- 企業の希望は、シミュレーションの世界であり、小学生に向けた目標設定に興味が出てきている。企業からはバーチャルインターシップのイメージになるか。企業としてはゴールに向けたチームはつくれるが、人材を見つけて採用することを考えているのではないか。
- 参加者のメリット、企業のメリット、求心力がでるもの、インフラ、テーマ、モチベーションを考える必要がある。
- 例えば、コンテストで勝つためにプロジェクトを組んでチームで出場。学生はそこで名前があがれば、成績以上の評価が企業でされる。大学との相違点について、特に学生を売り出すことを考えるべきではないか。
- コンテストは情報（技術）を隠さないで公開することが必要ではないか。
- テーマとしては答えのないものを設定すること。間口を広げるか、絞るか。モノづくりについてはわかりやすい可能性はある。株価予想コンテストなど。
- 学生に夢を持たせる取り組みにしたい。

V. 今後のスケジュール

- 26年度に課題の洗い出し、問題設定をして27年度の構想案へ進めていくことにした。
- 次回は、5月20日（火）16：00から開催することにした。